

ブラックフライアーズ劇場の誕生

磯 山 甚 一

The Start of the Blackfriars Playhouse

Jinichi Isoyama

1576年に、ロンドン市内の修道院跡の建物に屋内劇場がつくられることになり、入場料をとって観客を集める手筈が整えられたことは、イングランドにおける演劇の歴史において前例のないことであった。

それ以前の時代において演劇とは主として屋外で行うものであった。プロの俳優たちが入場料をとって観客を集めて演技を行ったのは屋外であり、アマチュアの俳優たちが祝祭劇を上演するのも屋外であった。ただし、宮廷や貴族の館では屋内で上演されることもあったが、専用劇場ではなかったし限られた観客を対象にしたものであった。

不特定の多数の観客を収容する劇場という側面からながめた場合に、エリザベス朝の演劇が、演劇史の中で大きな転換点にあったということができるのはそこである。そのような転換を構成する事件の一つとして、第一次ブラックフライアーズ劇場の誕生をとらえてみよう。屋外劇場から屋内劇場へという転換点に位置しているからである。

この劇場の誕生は多くの偶然の所産であったようにも見えるし、必然的

な成り行きであったようにも見えてくるから不思議である。

さて、そもそも観客のないところで演劇は成立しえないのであるから、演劇を成り立たせようとする人々にとってまず関心のあるのは、観客をどのようにして確保するかということである。たとえば古代ギリシャにおいては演劇は国家的行事であったから、観客を収容する劇場をつくるために莫大な費用を投入し、大きな富が劇場をめぐって消費された。

イングランドにおいても、エリザベス朝の商業演劇の興隆にいたるまでは、一般の人々にとって演劇は共同体が主催して行うものが主流であり、観客は演劇を成り立たせるための一部として参加していた。その一方で商業演劇は、6名ぐらいのごく少ない人数の役者グループが、町から町へと観客を求めて巡業するという形態をとった。これらの演劇はいずれも屋外で行われた。

1576年にジェームズ・バーベッジが「劇場座」という商業演劇のための最初の専用劇場をロンドン市郊外に作ったときも、舞台をおおう屋根を省略した屋外劇場であったのは、そういう伝統からすれば自然の成り行きであったろう。

同じ年にロンドン市内に誕生したのがブラックフライアーズ劇場であった。こちらは、もともと修道院として作られた既存の建物を利用して、リチャード・ファラントが内部を改装して劇場に仕立てあげた。さらに、それは表向きは商業演劇のための劇場として作られたわけではなかった。宮廷において上演する芝居を、少年劇団の俳優たちに教えるための劇場、つまり稽古場であり、その模様を限られた人々を対象に公開するという建前であった。

この劇場は、旧ブラックフライアーズ修道院の建物を利用して、一部を改造してつくられたことが知られているが、建物の中のどこにあったのか、どういう構造だったか、ということがそもそもはっきりとはわかっていな

いなど、伝えられていない部分が少なくない。

以下は、ブラックフライアーズ劇場がどのようにして誕生することになったのか、数奇な運命をたどったある修道院をめぐる歴史である。

1275年

ドミニコ派の修道士たちが、ロンドンの西部セント・ポール寺院とテムズ川のあいだの土地を入手した。ロンドンでは当初ホルボーン地区に修道院を構えていたのであるが、移転するための措置であった。移転の理由ははっきりしない。

新しい修道院は、ロンドン市に入る7つの城門のうち、一番西にあるラドゲイトに接する土地である。市の城壁は、ラドゲイトから南側に延びていた部分が壊され、西側に移動させられた。修道院は城壁の東側であり、ロンドン市内に位置することになった。ただし修道院内にはロンドン市当局の管轄権は及ばず、特別な区域である。

その修道士たちは黒い衣をまとっていたことから黒僧（ブラックフライアーズ）と呼ばれ、これがブラックフライアーズ修道院の始まりである。

移転当時のイングランド王はエドワード一世、王妃はカスティラのエレノアで、修道士たちに援助をおしかなかったという。

フランスのラングドックにおいて、聖ドミニックによってドミニコ派修道会が創立されたのは1215年のことである。まもなく、フランス、スペイン、イタリアに修道会の拠点がつくられた。修道士たちがイングランドに最初やってきたのは1221年のことであった。

1522年

この年、神聖ローマ皇帝にしてスペイン王のカルル五世が、ヘンリー八世の治世のもとイングランドを訪れた。迎賓館となったのがブラックフ

ライアーズ修道院であった。このとき、隣にあったブライドウェル宮殿を宿舎とする従者たちとカール五世との連絡が容易になるように、修道院と宮殿とのあいだに木造の橋が架けられた。

ヘンリー八世の妃であったアラゴンのキャサリンは、カール五世にとっては叔母にあたる。ヘンリーとキャサリンの結婚は最初は幸福なものだったとされており、この時はまだ二人のあいだの離婚問題はおこっていなかった。

この頃、イングランドでは修道士の勢力はかつてのおもかげはなく、ブラックフライアーズ修道院の修道士の数も少なくなっていたので、修道院の建物は、一部が住居として貸しだされていた。

カール五世の訪問にあわせて、1522年の時点でそこに住居を構えていた人々の名前が記録されており、その中には、William Lord Cobham (フォールスタッフのモデルとされ、もとは『ヘンリー四世』の中に実名で登場した Sir John Oldcastle の子孫にあたる Sir William Brook のこと)、 Sir William Kingston, Sir William Parr (ヘンリーの6番め、すなわち最後の王妃となったキャサリン・パーの兄弟) などの名がある。

当時ヨーロッパで権勢並ぶものなかったカール五世の滞在のためにブラックフライアーズ修道院が選ばれたことは、この建物が宮廷に比べられるほどの立派なものであったことをうかがわせるだろう。

1529年

ブラックフライアーズ修道院の建物内の一室にローマ教皇の使節が到着し、ヘンリー八世とキャサリンとの離婚問題に関する法廷が開かれた。

ヘンリーは、王妃アラゴンのキャサリンとのあいだの6人の子供たちが次々と死んで、メアリーしか残らなかったため、自分とキャサリンが結婚したことが、教会法に違反するためではないかと思い始めたらしい。キャ

サリンは、形の上だけであれすでに兄アーサーと結婚していたからである（キャサリンの持参金を返さなくてもいいように、兄の死後父ヘンリー七世が取り計らった）。また男子の嫡出の世継が欲しかったが、キャサリンはもう40歳を過ぎていて望みは薄い。すでにアン・ブーリンと通じていた王が、王妃に「離婚」のことを伝えたのは1526年であった。

次の1527年に、二人の結婚が無効であることを認めるよう求められたのは、当時のローマ教皇クレメンス七世である。翌1528年に教皇使節として任命され、1529年ブラックフライアーズ修道院において離婚問題の裁判にあたったのは、ローマから送られた枢機卿ロレンゾ・カンベッジョ、ならびにイングランド最後の枢機卿となるトーマス・ウルジーであった。

しかし、ヨーロッパの政治情勢をみると、すでに1527年にキャサリンの甥であるカール五世がローマに侵入して掠奪をほしのままにし（いわゆる「ローマの掠奪」）、ローマ教皇とイタリアは事実上カール五世の支配下にあった。教皇は、カール五世の叔母を窮地におとし入れるようなヘンリーの願いは、認めることはできない政治的な状況にあった。

ブラックフライアーズ修道院での法廷はなんら決定も下せないまま、カンベッジョは休廷を宣言し、教皇は彼をローマへと呼び戻した。ウルジーは失脚する。

1536年

議会（1529年から1536年まで開かれた宗教改革議会）は、ローマとの断交を完成して教会よりも国家が優越するという法律を通過させ、イングランドの修道院のうち規模の小さいものを解散し、その財産をすべて没収するという法律「小修道院解散法」を承認した。この段階ではまだブラックフライアーズ修道院は解散していない。大修道院については法律によるいっせいで解散とはされず、説得により自発的解散がすすめられた。大修道院

長が貴族院に議席を有していたことへの配慮であった。

これより先の1533年 5月23日には、ヘンリーとキャサリンの結婚が無効であることが、トーマス・克蘭マーによって宣言され、その年の 1月25日にすでにヘンリーはアン・ブーリンと密かに結婚していたので、5月28日にはその結婚が有効であると宣言された。

1538年11月12日

この日を期してブラックフライアーズ修道院が解散され、その土地、建物は王の手に没収された。かつて1315年には70名を数えた修道士であったが、残っていたのはわずかに16名または17名であった。解散の前から修道院のなかに建物を借りて住んでいた人々は手厚く扱われた。

このあと1540年から1550年のあいだに他の16の土地区画がつぎつぎと売却または譲渡されていく。そのため、1576年にブラックフライアーズ劇場が成立したときには、敷地内には多くの人々が住んでいた。

修道院はロンドン市内に位置していたが、それまで修道士たちは敷地内へのロンドン市当局の管轄権を排除して特権を保持してきた。解散を好機とみた市当局は、王に対して旧修道院内への管轄権を請求したが、王は市当局の権力の増大を好まなかったので、ついに認めなかった。王は敷地内に入るための四つの門の鍵を、敷地内の特権を象徴するものとして、敷地内に住んでいたサー・ジョン・ポーティナリ（Sir John Portynary）という人物に託した。

したがってブラックフライアーズ地区は、修道院解散後も特殊な自由区（liberty）として残ることになる。そこに住む住民たちは独自に自治組織をつくった。この事実のはちにブラックフライアーズ劇場が成立するためにも重要な役割をはたす。

1539年

この年には「大修道院解散法」が制定された。この結果、残っていた修道院も解散させられ、没収された。大修道院長も議会における議席を失った。「解散された修道院の院長の多くは主教か大聖堂首席司祭になった。修道士は十分年金を与えられ、その中の多くは年金と同じくらい聖職禄を受けた。」(注1)

ヘンリーは、1540年代の初めまでに「没収した修道院の土地の大部分を貴族、廷臣、官僚や商人に売り、彼らはその大部分を一段下のものに転売した」(注2)のである。

1545年 3月11日

サー・トーマス・カワードン (Sir Thomas Cawarden) が、常設王室祝典局の初代長官として王から任じられた。祝典局長官の職が最初に設けられたのは1494年のことであるが、当初は、祝祭のたびごとに宮廷の祝典の費用の支出と監督をするため臨時に任じられていた官職である。

王室祝典局は、エリザベス朝の言い方では“ standing offices ” (常設部局) と呼ばれた部局の一つである。王室の財政とは切り離されて独立して運営され、ロンドンにおいて宮廷とは別の場所に事務所をおいた。宮内大臣 (the Lord Chamberlain) によって、直接ではないがある種の監督を受けていた。

1547年 2月

この年の1月にヘンリー八世が死んだ。2月には、それまでセント・ポール寺院の北側のウォリック亭 (the royal mansion of Warwick Inn) におかれていた王室祝典局は、長官サー・トーマス・カワードンの監督のもとにブラックフライアーズへ移転した。第二次王室祝典局である。

ブラックフライアーズ劇場の誕生

すでにヘンリー王の死の前から、ブラックフライアーズの建物のなかの「パーラメント・チェインバー」(Parliament Chamber)と呼ばれる部分は宮廷で芝居や仮面劇などを上演するときのために、衣装や大道具・小道具類が保管されていた。

1548年 4月 4日

サー・トーマス・カワーデンは、ブラックフライアーズの建物と敷地の多くの部分を借り受け、祝典局の事務所として使用する。

1550年 3月12日

この日に、ヘンリー八世の遺言執行人は、もとのブラックフライアーズの土地区画や建物で譲渡されずに残っていた部分を、サー・トーマス・カワーデンに無償で譲渡した。これをもってすべての土地区画・建物が処分された。カワーデンに対する譲渡は、王室祝典局長官として王のためにつくした功績によるものらしい。

サー・トーマスは最初の常設王室祝典局長官であり、その事務所はこの敷地内に設置されていた。譲渡された土地・建物は、サー・トーマスによって手が加えられ、住居などとして貸し出された。

1559年 8月29日

王室祝典局長官サー・トーマス・カワーデンが死亡した。この年の1月15日に挙行されたエリザベス女王の戴冠式を、長官として監督したのもつかの間のことであった。子供がなかったので、遺言執行人であるレディ・カワーデンとサー・ウィリアム・モア(Sir William More)が、ブラックフライアーズの土地・建物も含めて遺産を引き継いだ。

1560年 1月18日

祝典局の長官としての任務を引き継ぐべく任じられたのは、サー・トーマス・ベンジャー（Sir Thomas Benger）であった。（なお、1572年に彼が死んだあとは、1579年にサー・エドモンド・ティルニー（Sir Edmund Tilney）が任命されるまで祝典局長官の職は空席のまま、その任務は宮内大臣が一括して監督し、実際の仕事には代理人があたった。）

1560年 2月20日

レディ・カワードンが死んだのにもない、遺産はサー・ウィリアム・モア一人の所有に帰する。

1560年 6月10日

サー・ウィリアムは、修道院の建物を祝典局の事務所として使用することを認めなかったらしい。そこで、祝典局は市の北西部郊外クラークンウェルにあったセント・ジョン修道院跡（the late hospital of St. John of Jerusalem）へと移転した（第三次の祝典局事務所）。

サー・ウィリアムは、空室となった祝典局事務所跡をサー・ヘンリー・ネヴィル（Sir Henry Neville）という人物に21年の契約で貸した。サー・ヘンリーは、その部屋にいくつかの仕切りを作った。

ブラックフライアーズと祝典局とのつながりは一応ここで途切れるが、のちになって別の形で関係するようになる。

1568年

サー・ウィリアムは、祝典局事務所跡の部屋を 100ポンドを払ってサー・ヘンリー・ネヴィルから貸借権を買い戻す。手を加えてからまた貸し出すためであったらしい。

その後少しのあいだ、そこは絹染色組合（Silk Dyer's Company）が使用した。

1571年

事務所跡の部屋は、前出のコバム卿（William Lord Cobham）が借りて、1576年まで所有する。

1576年 8月27日

コバム卿が手放した部屋を借りるために、ウィンザー礼拝堂少年劇団のマスターであり、王室礼拝堂少年劇団のマスター代理であったリチャード・ファラントは、所有者サー・ウィリアム・モアに宛てて手紙を書いた。ファラントは以前にその部屋を借りていたネヴィルから紹介されたのである。

『・・・先までコバム卿の所有であったブラックフライアーズの建物をどうぞ私に貸して頂きたく心よりお願い申し上げる次第でございます。・・・まだ閣下には面識のない私でございますが、この契約に関わることがらについて、閣下には何ごともお気に召さぬことはないと、神にかけて希望いたす次第でございます。もしもご好意を得ることとができますならばさらにお願いがございます。それは、仕切りを一つ取り払いまして、二つの部屋を一続きの部屋にいたしたいのでございます。私が立退く時、または契約期限が切れました時には、もとに戻すつもりでございます。・・・』（注3）

以前の借り手であったネヴィルも、モアに宛てて同じ日に手紙を書き、ファラントを推薦しているが、はたして二人はどんな関係だったのだろうか？

『・・・私の友人であるファラント氏にご厚情をたまわりたく、氏は、私がかつて閣下より借りておりました建物が、近々貸しだされると伺いまして、貸借料金については他のどんな人よりもよい額を提示してお借りしたいとのことでございます。願いがかないますれば現在の氏にとりましてはまことに喜ばしい限りでして、ご厚情に報いることに関しては氏ほどの人は他にはないことを、氏にかわって申しあげる次第でございます。・・・』(注4)

その建物のなかで少年劇団は、のちに宮廷で上演する芝居の稽古を公開するという名目で芝居を上演し、入場料をとって観客を集めようというのであった。手紙のなかでは、使用目的については何も述べられていない。貸主のサー・ウィリアムはそういうふうで使用されるとはまるで知らず、ただ、少年たちの演技指導のため(for the teaching of the Children of the Chapel)とだけ知らされていた。(注5)

そのような建前の裏に隠されたファラントの本音の部分は、観客を集めてひともうけしようという商業主義だったのであるが、サー・ウィリアムも含めて1576年の時点での住民にはまだ理解されなかった、とみてよいであろう。職業演劇はまだ宿屋の中庭などで上演していたころであり、ファラントはかつて前例のないことを始めようとしていたのである。とにかくこのときは、ブラックフライアーズの住民から劇場を開くことに対する反対の声はあがらなかった。

事情はどふであれ、ファラントはイングランド最初の商業演劇の室内劇場をつくることになったのである。

1576年12月20日

借主ファラントと貸主モアのあいだで、貸借契約に署名がされた。ネヴィ

ルが借りていた部屋をすべて借りることになっていた。年間 14ポンドの貸借料である(偶然であろうが、これはバーベッジが劇場を建てるためにジャイルズ・アレンから借りた土地の貸借料と同じ額である)。

ファラントは、モアと契約するまえに、サー・ヘンリー・ネヴィルが作った部屋のあいだの仕切りを一つだけ取り除きたいということを伝え(手紙にも書いてある)、モアもそれを了承した。しかしファラントが実際に取り除いた仕切りは一つだけではなかったのである。それはファラントが犯した契約違反のうちの一つにすぎなかったが。

これより先1576年 4月13日には、ジェイムズ・バーベッジが専用の劇場を建てるためにロンドン市の北の郊外に21年間の契約で敷地を借りうけており、ファラントはバーベッジの事業計画によって刺激されたのではないかとされている(「劇場座」は翌年の8月1日までには使用されていたことがわかっている)。

しかし、劇場座を建てるためにバーベッジが費やした金額はおおよそ 650ポンドであり、ファラントは、そのような莫大な費用を捻出して専用劇場を建てることは自分には不可能とみなしたのであろうか? 既存の建物を利用しようというのは、屋内劇場を作ろうという意識が第一義的であったのではなく、資金面の都合だったという推測も可能である。

ファラントが建物を借りることになり、契約書が取り交わされても、ブラックフライアーズの住民たちは特に反対はしなかった。稽古を公開するだけだと聞かされていたからである。

しかし、劇場の使用開始後はそう簡単にことはこぼなかった。稽古をするというのが何を意味するのかがわかるまでに、さほど時を必要としなかった。サー・ウィリアムの言葉によれば、実情は“a continual house for plays”になってしまったのだった。(注6)

これを憤ったサー・ウィリアムと劇団関係者との争いは、第一次のブラッ

クフライアーズ劇場の8年間を通じて続けられた。契約書には、建物を芝居上演に使ってはならないという条項はなかったので、サー・ウィリアムは、建物を又貸ししないという条項に違反していることをたてに、明け渡しを求め続けたのである。やがて、1584年の劇場の閉鎖をもって、所有者であるサー・ウィリアムの勝利で終わることになる。

この劇場は、本格的な商業演劇の拠点としての室内劇場とは、だいぶ趣きを異にするものではなかったかと想像するのであるが、ともかくにも最初の室内劇場には違いなかった。

注1. G.M. トレヴェリアン『イギリス史2』(みすず書房、1974年)、37ページ。

2. 同書、36ページ。

3. Irwin Smith, *Shakespeare's Blackfriars Playhouse*, (New York University Press, 1964), p. 135.

4. *Ibid.*, p. 135.

5. *Ibid.*, p. 467. "Sir William More's Comment on the Farrant Lease"

6. *Ibid.*, p. 467.

付記、ブラックフライアーズ修道院、ならびにブラックフライアーズ劇場にかかわる歴史的な事実関係については、主として E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage* および、Irwin Smith, *Shakespeare's Blackfriars Playhouse* による。